

黒毛和種肥育牛における濃厚飼料給与量と疾病発生の実態調査

井上一輝<sup>1)</sup>・○古川智博・中島貞彦  
(佐賀上場営農セ・<sup>1)</sup>西松浦普及セ)

【目的】

現在、佐賀県では、「新佐賀牛飼養給与体系ガイドライン」を作成し、肥育前期の粗飼料多給による肉質の向上を図っている。肥育前期の濃厚飼料摂取量の違いが、枝肉成績に及ぼす影響について現地実証中であるが、今回は肥育前期の濃厚飼料給与量が疾病発生に及ぼす影響を調査した。

【材料及び方法】

5戸の農家について、2004～2005年度の2年間でのビタミンA欠乏症、胃炎・胃腸炎および肝炎の発生割合を、肥育前期の濃厚飼料給与体系ごとに分類し、調査比較した。発生頭数は2年間の平均とし、1回の治療で2種類の疾病と診断された場合はそれぞれ1回と計算した。また、発生割合は発生頭数/飼養頭数で求めた。

【結果及び考察】

今回調査した5戸の農家における肥育前期（肥育開始から6ヶ月間）の平均濃厚飼料給与量および粗飼料の給与量は表1のとおりであった。

表1 肥育前期における飼料給与量

農家	飼養頭数	肥育前期給与量 kg/日	
		濃厚飼料	粗飼料
A	500	4.2	4.4
B	250	5.9	3
C	560	6.6	3.3
D	630	7.2	3.7
E	470	7.5	3.3

佐賀県で作成しているガイドラインの平均濃厚飼料給与量が6.0kgであることから、A・B農家を通常給与農家、C・D・E農家を濃厚飼料多給農家とした。

全期間をとおした疾病の発生状況は、ビタミンA欠乏症についてはA農家の発生率は0.1%、B農家が0%なのに対し、C農家で0.7%、D農家で0.3%、E農家で4.6%と、濃厚飼料多給農家がやや高い傾向にあった。また、胃炎・胃腸炎、肝炎についても同様の傾向であった（表2）。

肥育後期（12ヶ月以降）の疾病の発生は、ビタミンA欠乏症については、A、B農家がともに

表2 肥育全期間内における疾病の発生状況

	農家	ビタミン欠乏症		胃炎・胃腸炎		肝炎	
		発生頭数	発生割合	発生頭数	発生割合	発生頭数	発生割合
通常給与	A	0.5	0.1%	17.5	3.5%	4.5	0.9%
	B	0	0.0%	14	5.6%	1	0.4%
濃厚飼料多給	C	3.5	0.7%	50	9.6%	22	4.2%
	D	1.5	0.3%	14	2.5%	4.5	0.8%
	E	20.5	4.6%	36.5	8.1%	6.5	1.4%

発生なしであったのに対し、C農家0.6%、D農家0.2%、E農家2.7%とともに高い数値を示した。胃腸炎患者や肝炎の発生においても、D農家で発生割合が低かったものの、他の2農家は高い傾向にあった（表3）。

表3 肥育後期における疾病の発生状況

	農家	ビタミン欠乏症		胃炎・胃腸炎		肝炎	
		発生頭数	発生割合	発生頭数	発生割合	発生頭数	発生割合
通常給与	A	0	0.0%	1	0.2%	3	0.6%
	B	0	0.0%	2	0.8%	0.5	0.2%
濃厚飼料多給	C	3.5	0.6%	14	2.5%	14.5	2.6%
	D	1.5	0.2%	3	0.5%	3	0.5%
	E	12.5	2.7%	6.5	1.4%	5	1.1%

また、肥育後期における各疾病毎の治癒率については、発生率の低かったD農家において、最も低い値を示した（表4）。特に胃炎・胃腸炎については、治療した6頭のうち、死亡・廃用した頭数が5頭と治りにくい傾向にあった。

表4 各疾病毎の死亡・廃用率（肥育後期）

農家	治癒率		
	ビタ欠	胃炎・胃腸炎	肝炎
A	-	50%	67%
B	-	50%	100%
C	0%	54%	45%
D	67%	83%	67%
E	12%	31%	60%

このことから、肥育前期の濃厚飼料多給は、肥育後期の内臓疾病を増加させる要因の一つになると考えられた。現在肥育前期に濃厚飼料多給した場合の肉質や飼料摂取量・疾病の発生などへの影響について肥育試験を行っている。